

⑦ 帝室技芸員

帝国博物館総長

本年十月、皇室の保護により美術家を優遇するという趣旨に基づいて帝室技芸員制度が定められ、帝国博物館がその運営に当たることとなった。同館総長九鬼隆一が技芸員撰択委員長となり、佐野常民、浜尾新、前田正名、川田剛、山高信離らが撰択委員となって橋本雅邦、狩野永恵、森寛斎、守住貫魚、田崎草雲、高村光雲、石川光明、加納夏雄、柴田是真、伊達弥助ら一〇名を撰出。うち四名は本校教員である。技芸員には左記のような命令書（前田香雪著『後素談叢』巻一より）が下され、また、年俸百円が支給された。

命令書

第一 帝室技芸員は本邦美術を奨励する為め古を徴し今を稽へ工芸技術を練磨し後進を誘導するを旨とすべし

第二 技芸員は其志操を高潔にし其体面を損ずる如き挙動あるべからず

第三 技芸員は宮内省より特に製作を命ぜらるゝことあるべし但其製作に対しては相当の報酬を支給するものとす

第四 技芸員は毎年兩度若くは其工芸技術上に関する事項に就き帝国博物館総長より諮問を受け若くは報告を命ぜらるゝ時は之に応答し若くは報告書を出すべし但報告書の方案は総長之を指示す

第五 帝国博物館総長は技芸員の業務素行を監督し随時技芸員の製作物を臨検し又は製作品を檢視することあるべし

右の條項宮内大臣の達により命令す

⑧ 第三回内国勸業博覧会

開校より一年余りたった二十三年四月一日、上野公園で第三回内国勸業博覧会が開幕した。審査官長は九鬼隆一。本校からは岡倉寛三をはじめとして高村光雲、橋本雅邦、川端玉章、黒川真頼ら教官が審査官に加わった。岡倉は審査報告の執筆も担当している。美術部門は龍池会路線が九鬼・岡倉路線に取って替られ、特に左記のような本校教官たちの力作が出品されたことにより面目を一新した。

秋景山水図（白雲紅樹）一等妙技賞 橋本雅邦

素銅彫蘭陵王置物右同 海野勝珉

銀製百鶴彫花瓶右同 加納夏雄

秋野鹿図二等妙技賞 巨勢小石

墨堤桜花図（墨堤春曉）右同 川端玉章

牙彫加茂長明像右同 石川光明

木彫神武天皇立像右同 竹内久一

木製秋鹿彫屏風右同 石川光明

神功皇后洗髮図三等妙技賞 結城正明

木彫大塔宮（護良親王）乗馬像右同 山田鬼斎

木彫馬置物右同 後藤貞行

蒔絵香盆山水図右同 白山松哉

臚銀鴨菓子器右同 岡崎雪声

（同博覧会事務局編『内国勸業博覧会褒賞授与人名録』による。）

因みに、本校「漢文」授業担当嘱託教師長尾雨山は『国華』第七号（明治二十三年四月）にこの博覧会に関する論説を発表している。その中で彼はこの博覧会が前二回の内国勸業博覧会と比べて(1)悉く出品を鑑別し、努めて悪作庸製を排却しようとしたこと、(2)流派別に出品および審査する方法を撤廃したこと、(3)画面の大きさの規定と粗密二様の画を出品すべしという規定、および製作に装飾を加えてはならないという規定などを撤廃したこと、という三点において大きく進歩したと述べている。ただし、欠点もあるとし、それは(1)会場が狭く観賞に不向きであること、(2)壁面を覆う布の紺紫色が観賞を妨げるばかりでなく、足りない部分を有紋の粗布で補っていることがいかにも殺風景であること、(3)展列の順序に配慮が不足していること、(4)作品はなお厳選を要することであるとしている。雨山が進歩した点としてあげているのは、いずれもフェノロサや岡倉が以前から批判していた点であった。この博覧会においては漸く彼らの主張が生かされたものと見える。

なお、雨山は続けて作品評も試み、秀作として橋本雅邦の白雲紅葉の図（「白雲紅樹」）、川端玉章の墨江春早の図（「墨堤春曉」）、荒木寛敏の孔雀の図、岸竹堂の群虎の図、巨勢小石の秋原鹿鳴の図（「秋野鹿」）、野村文孝の春夜、秋山の二図、竹内久一の神武天皇御像、山田鬼斎の護良親王の像、岡崎雪声の雲龍文銅製門扉その他をとり上げている。雅邦と玉章の作についてのくだりを左に掲げる。

氣象雄大最モ驚クヘキハ橋本川端二氏ノ畫ニシテ滿山ノ紅葉霜ニ飽キ白雲秋錦ヲ掩護シ來リテ杜牧停車ノ吟賞ヲ待ツカカシ老柏崖

ニ垂レ遠近ノ林巒暮烟蒼然トシテ至リ半林ノ斜陽猶ホ殘照ヲ逗メ風來ルニ非スシテ一二紅葉ノ溪水ニ流點シ哀猿燭叫ヒテ何ノ處ニ楚客ノ斷腸スルモノアルカ深山幽絶ノ境狀筆端ニ描出シテ觀者ヲシテ人間亦猶ホ此仙寰隱ルヘキアルカ無心ノ山公ヲ一呼シ一路ノ由ル所ヲ問ハント欲スルノ想アラシム其着色中濃淡アリ遠近アリ筆墨ノ雄厚奇傑狩野ノ門徑ヲ一躍シテ宋人ノ長處ヲ參シ出スニ自家ノ新機軸ヲ以テス明治美術ノ進境ヲ見ルヘキモノ前ニ未タ此幅ノ如キヲ見サルナリ 川端氏ハ圓山ノ蘊籍淹潤ヲ以テ筆力ノ沈厚ヲ加ヘ遠近濃淡姿態風趣宛轉關生シ以テ一幅ノ墨江春早ノ圖トナセリ看來レハ夜來微雨収マリテ花腮露ヲ帯ヒ一梢猶ホ朝陽ヲ迎ヘテ笑ハントスルカ如ク雙尖峯ノ遙黛ハ青一點ノ螺髻ヲ洗ヒ來リテ半面ヲ遠林ノ端ニ出シ仙女ノ嬌差袖ヲ掩フノ情致ヲ寄セ一篙ノ新漲間鷗兩三拍拍機ヲ忘レ端ナク當年中郎ノ詠ヲ想ハシム實景ノ畫ハ最モ人ノ難シトスル所ナリ而シテ能ク此風趣ヲ巨幅中ニ曲盡シテ橋本氏ト俱ニ場中ニ雄視スルハ大ニ會場ヲ壯ニスルノ觀アリ

⑨ 墨田川盃流しの宴

明治二十三年八月二十一日、校長心得岡倉覚三はシカゴ、コロンプス世界博覧会（同二十六年）参同の気運を盛り上げるために、向島の料亭八百松で集会を開き、趣向として墨田川盃流しの宴を催した。主客として米国人ガワードが招かれたが、彼は『臨時博覧会事務局報告』（明治二十八年五月、同事務局）に

「明治二十三年六月米人グース、タヴス、ガワード（元東京駐節